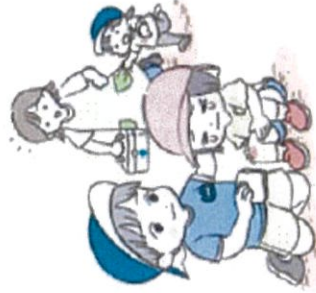


先生からの 手紙



育ってほしい
「ちから」とは？



子どもに育ってほしい「ちから」には、目に見える「ちから」と、目では見ることが難しい「ちから」があります。

目に見える「ちから」は、「逆上がりができた」「跳び箱が跳べた」といった、いろいろなことができるようになる「ちから」です。目では見ることが難しい「ちから」には「自信が持てるようになった」「自己を肯定する力」、「諦めない気持ち」（目標に向かって頑張る力）、「ちよつと我慢しよう」（感情をコントロールする力）、「〇〇したら喜んでくれるかなあ」（人とうまく関わる力）といった「ちから」です。

どちらの「ちから」も大切ですが、ついつい大人は目に見え

る「ちから」の方に期待を求めてしまいがちです。目では見ることが難しい「ちから」は、生きていく上での基礎、土台となるものです。樹木に例えると、根っこになります。土の中に隠れている根っこは、大風が吹いても倒れない土台であり、果樹の場合は、土の中の栄養を取り込み、甘く大きな実をつけるための土台でもあります。幼児教育が根っこの教育といわれるゆえんは、ここにあります。

私たち大人に求められているのは、感受性を磨き、アンテナを張り巡らせて、目には見えない子どもの心の中、つまり「根っこの白ち」という宝物を感じ取ることはないでしょうか。

今月の先生



兵庫県神戸市
社会福祉法人 待子福祉会
幼児発達支援認定こども園
待子保育園 園長
原田健次先生

illustration omochi